幼年教育研究年報　第35巻　63－68
The Annual Research on Early Childhood, 2013

森での遊びにおける幼児の関わりについての研究
―「できる／できない」を超えて―

伊藤　　優[1]・保木井啓史[2]・七木田　敦[3]

Research on relationship of children in play of forest
― beyond the children's skill ―

Yu ITO, Takafumi HOKII, Atsushi NANAKIDA

Abstract: The study aims at exploring the relationship of children from the same age group and that of children from different age group in relation to the differences in their physical environmental elements through play of forest. From the analysis of results, it can be seen that in the group of children from different age groups, the differences in their physical performances leads to the cultivation of a yearning and desire to play as well as to give help. On the other hand, in a group of children of the same age, when the differences in their physical performance is realized, it leads to jealousy and impatience among the children. But because of the characteristics of the forest, children can look for other play without other children within the boundary of the forest. These Characteristics are (1) Forest offers a place where children freely decide what to play by themselves. (2) Because the insects and plants in which children are interested, exist in the forest, it has the diversity and the complexity which do not remain in the fixed method of play. So forest's play spreads according to the children's infinite imaginative power. Therefore, it can be said that a child's performance is greatly influenced by the differences in age interaction as well as differences in physical performance. While forest exposes the differences of age and physical performance in children, it also promotes and develops children's play and relationship.

Key Words: relationship of children, the same age group, the different age group, play of forest

はじめに

幼児同士が関わる機会が減少しているといわれている現代において，友達と集団生活を営むことを基本とする幼稚園の重要性が増してきている。幼児期は「知的にそして情緒的にも，また人間関係の面でも大きく成長し発達する時期」であり，「幼児同士の関係の中から互いに協力することを覚え，その協力し合う関係を生かして，一人ではできそうもないことにも取り組んでいく」重要な時期でもある（国立教育政策研究所教育課程研究センター，2005）。

幼児は，遊びなどの自発的な活動のなかで，他者と関わりながら成長する。幼児同士の関わりの研究は多く存在するものの，それらの研究の多くは同年齢児の関わりに焦点を当てて検討されている（牧・湯澤，2011；都築・上田，2009）。幼稚園には同年齢児だけでなく，異年齢児も重要な他者として存在する。異年齢児の関わりの研究について，遠藤・松山・内藤（2010）は，異年齢児集団における「ふれあい遊び」を分析し，幼児の特性を示す相互の関係性について示している。また，松永・郷式（2008）は，３～５歳の幼児を対象に，異年齢児との接触経験はそれがきょうだいでなくとも，他者の心理状態についての理解である「心の理論」の獲得

1　広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
2　広島大学大学院教育学研究科博士課程前期
3　広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設

に一定の促進的な影響を与えることを明らかにしている。

しかし，これらの研究は対象とする幼児の年齢区分を明確に分けて分析しており，同年齢児・異年齢児の年齢差によって比較分析されていない。また，幼児の関わりについて，幼児のやりとりのみに焦点を当てて検討しており，物理的な環境要因についてまでは検討されていない。同年齢・異年齢の様々な他者と集団で生活する幼稚園だからこそ，日常の中での同年齢児・異年齢児の関わりの特質についてその背景となる物理的な環境要因も含めて検討していく必要があるといえる。

本研究では，同年齢児・異年齢児との関わりを検討する上で，Ｆ幼稚園の森での遊びに着目する。Ｆ幼稚園は，平成18年度以降から現在まで「森の幼稚園構想」として，幼稚園の敷地内に存在する森での活動を保育の中に積極的に位置付けている。森の遊びにおいて，幼児は全身の運動感覚とバランス能力などを複合的に用いて活動を展開していく必要がある（落合･関口･杉村・上田・松尾・久原・日切・藤橋，2011）。そのため，年齢及び身体運用による幼児の「できる／できない」の差が顕著に顕れると考えられる。身体運用による「できる／できない」の差が顕れる場面において，多様な異年齢児の関わりが発生することが事例としてあげられていることからも（坪井・山口，2005），身体運用による「できる／できない」を顕在化させる森での活動が同年齢児・異年齢児の関わりの特質を描き出すのに適しているのではないかと考えられる。

以上のことから，本研究では森での遊びを通した同年齢児・異年齢児の関わりの特質について，その背景となる物理的な環境要因も含めて探ることを目的とする。

方　法

(1) 観察対象：Ｆ幼稚園の森で遊ぶ４歳児クラス（35名）と５歳児クラス（35名）の幼児を対象とし，同年齢児・異年齢児の関わりの両方を観察した。３歳児は森で遊ぶことが少なかったため対象から外した。

(2) 観察期間及び観察時間：2012年５月17日から７月５日の毎週木曜日（計420分）に観察を行った。観察時間は，幼児が登園して森で自由に遊ぶ９時から10時10分までとした。

なお，自由遊びの時間は活動場所が森に限定されている訳ではなく，園庭などで遊んでもよいことになっている。観察時，５歳児クラスは担任保育者が森での遊びを積極的に誘いかけていたこともあり，ほとんどの幼児が森で遊んでいた。４歳児クラスの幼児は，園庭を主要な活動場所としている様子であったが，園庭での遊びの延長，虫探しや森の遊具で遊ぶなどの目的で，しばしば森でも活動していた。

(3) 観察方法：消極的参与の立場による自然観察法（柴山，2006）によって行い，４名の調査者によるフィールドノーツへの筆記と，デジタルカメラ１台を使用して記録した。

(4) 分析方法：観察記録をエピソードとしてテクスト化したもの全19事例を，調査者４名が幼児の関わりの同年齢児・異年齢児の違いで分類し，それぞれのエピソードを同年齢児の関わりと異年齢児の関わりに分けた後，身体運用の「できる／できない」が顕在化した場面に着目して，エピソードをもとに調査者間で検討した。

結果と考察

１．同年齢児の関わり

エピソード1-1　「丸太渡り」

５月17日　５歳女児Ａ子・Ｂ子・Ｃ子

５歳児Ａ子が丸太を上手にバランスを取りつつ歩いている。５歳児Ｂ子はＡ子が丸太の上を歩く姿をじっと見ている。

Ａ子が何度も渡っている姿を見て，Ｂ子も「私もやるー」と渡り始める。しかし，Ｂ子は何度やっても途中で落ちてしまう。そのため，Ａ子はＢ子に「こうやって手を広げたらいいよ」「タタタタって走って渡ったら？」とアドバイスするが，Ｂ子はＡ子のアドバイスには答えず，何度か挑戦した後「やーめた」と言い丸太から離れ，他の集団が遊んでいる所に行く。

その後Ａ子が一人で丸太渡りを続けていると，Ｂ子はＣ子と連れ立って丸太のところまで来て，虫や葉っぱを探し始める。そして，Ｂ子は丸太をテーブルに見立て，持ってきた葉っぱを丸太の上に置きながらＣ子と話している。それを見たＡ子は丸太渡りをやめ，Ｂ子とＣ子のもとに行き，一緒に虫や葉っぱを探し始める。

エピソード1-1は，同年齢児の関わりで，身体的な「できる／できない」の差が大きい場面である。

本エピソードでは「できない」幼児が早々に他の遊びに移行している。このような行為は

「できない」幼児が，「できる」幼児に能力差を見せつけられ，遊びの意欲を喪失しているように見える。本エピソードのように，特に立場が同じである同年齢児の関わりにおいて「できる／できない」が顕在化すると，「できない」幼児は「できる」幼児に対する嫉妬や「できない」ことに対する焦りを感じやすいと推察される。そのため，Ｂ子は素直にＡ子のアドバイスを聞きいれられないのではないかと考えられる。

本エピソードにおいて，丸太渡りをやめたＢ子は他の集団に向かって行ったが，その後もう一度Ａ子のいる丸太まで戻っている。そして，今度は先ほど渡りきれなかった丸太を，葉っぱや虫を置くテーブルに見立てて使用している。Ｂ子のこの行動に興味を示したＡ子は，自分の遊びをやめ，Ｂ子に近づいている。

先述したように，森での遊びは「できる／できない」を顕在化させやすいと考えられる。Ｂ子が丸太遊びをしている時，Ｂ子にとって丸太は，Ａ子のようには丸太渡りが「できない」ことを意識化させた対象であった。しかし，葉っぱや虫探しをするＢ子にとって丸太は，集めた葉っぱを置くテーブルとなった。つまり，Ｂ子は身体運用による「できない」を意識化させた丸太を，自分の興味関心によって新たな遊び道具として意味づけ，別の遊びの道具としての広がりを持たせている。森では身体を使う遊びだけでなく，虫探しやままごとなど幼児の見つけ方によっては様々な遊びを行うことが可能である。

森に存在する木や葉は特定の使い方が決まっているわけではないので，幼児は「できる／できない」にとどまらない遊びの幅を拡充させていると考えられる。

エピソード1-2-1　「森の群れ行動①」
６月14日　Ｄ男，Ｅ男ら４歳男児５・６人

Ｄ男を中心とした４歳男児５・６人が森の端付近（森の，園庭に接してる領域）を探索した後，Ｄ男を先頭に砂場に行こうとしている。森の端から砂場に行くには，急斜面を降りなくてはいけない。Ｄ男は，斜面をスムーズに降りるが，Ｅ男はおそるおそる降りる。先に降りたＤ男は，そのまま砂場に行こうとするが，Ｅ男がまだ来ていないことに気付き，Ｅ男の近くに戻って来る。そして，Ｄ男は斜面の下から手が届く場所までＥ男が降りてくると，Ｅ男の手を取って降りるのを手伝う。その後，Ｄ男を先頭に男児５・６人はまとまって砂場へと行き，砂場で遊び始める。

エピソード1-2-2　「森の群れ行動②」
６月28日　Ｆ太，Ｇ太ら５歳男児10名ほど

「森の奥」は，森の中でも特に木々が生い茂った場所である。そこに，Ｆ太，Ｇ太ら５歳男児ら10名ほどが集まり，「森の奥」への探検の相談をしている。

Ｇ太は数週間前の観察時，ボス的に他児を従わせて森を歩きまわっていた。しかし，今回はＦ太がその時よりも険しい道を通ることを提案する。そして，Ｇ太ではなく，Ｆ太が「いくぞ！」と声をかけ，先導する。Ｆ太の後をＧ太も含めた他の男児たちがついて「森の奥」を進んで行くが，途中でＧ太は戦いごっこのような遊びを始め，何人かが加わる。その後，Ｇ太は戦いごっこに参加した他児と共に，Ｆ太とは異なる比較的平たんな道を選んで進む。

Ｆ太は自分が先頭となって，ついて来た３人と一緒にさらに「森の奥」を探検する。すると，別の男児が「こっちのほうが近いよ」と別の道を示した。しかし，Ｆ太は何も言わず，そのまま進路を変えず進む。そのため，他児やその発言をした男児もＦ太の進路に従って「森の奥」を進んで行く。

エピソード1-2-1は森の端付近で群れを成して探索していた４歳男児数名が，探索を終え砂場に行こうとしている場面である。砂場に行くには急斜面を上手に降りるスキルが求められており，急斜面をスムーズに降りることが「できない」Ｅ男に対し，Ｄ男は手を貸している。その後，Ｄ男を先頭に砂場まで行くものの，砂場ではＤ男が主導的に遊びを行う様子はみられなかった。つまり，Ｄ男は砂場などの活動では必ずしも主導権を握る存在ではないが，急斜面などの険しい道をスムーズに進むことができるため，「できる／できない」が顕在化されやすい森では主導的に群れを率いていたと推察される。このことから，森で群れて活動する際は，幼児間で主導権をとる者が存在する可能性があることが示された。

エピソード1-2-2は，５歳児が「森の奥」と呼ばれる場所で探検を行っている場面である。「森の奥」は，斜面が多く，草木が生い茂り，足場も良くないため，森に慣れている５歳児が探検と称し遊ぶことが多い。この場所は木々が

多く，山際からはここでの様子が見えないため，ある意味閉ざされた空間である。このような空間では，他の遊びをしている他児からの刺激がないため，子どもたちが群れて自分たちだけの遊びに没頭し，群れを維持することができる。観察期間中，「森の奥」で幼児が一人で遊ぶことはなく，人数は変わるものの常に同年齢児で群れて行動していた。

Ｇ太は，森での活動以外でもリーダー的な役割を担うことが多い。しかし，エピソード1-2-2における主導権は，険しい道もスムーズに進めるＦ太が握っている。その後，しばらくはＦ太が主導権を持って険しい道を進んでいたが，Ｇ太が戦いごっこを始めることによって他児の興味を戦いごっこに移し，Ｇ太は自身に主導権を戻そうとしているようにとらえられる。エピソード1-2-2のＦ太とＧ太のように，幼児は群れを成して行動する際，度々主導権争いを行っていた。そして，エピソード1-2-2でも見られるように，このような主導権争いと連動して群れが集合・分裂している。もし異年齢児の集団であれば，身体運用のスキルが顕著であるため，主導権争いは起こりにくいだろう。そのため，このような主導権争いは同年齢児同士だからこそ生じるものだと考えられる。また，森での遊びはその時々の場所や天候によって求められる身体運用のスキルが異なっており，求められているスキルに応じて群れの主導権は幼児の間を移り変わる可能性がある。つまり，幼児はその時々の「できる／できない」によって主導権争いを繰り返し，集合・分裂しながら，森での遊びを楽しんでいるといえるだろう。

２．異年齢児の関わり

エピソード2-1　「ターザンロープ」

５月17日　５歳男児Ｈ太･Ｉ太，４歳男児Ｊ男･Ｋ男・Ｌ男・Ｍ男・Ｎ男

４歳児３人（Ｊ男・Ｋ男・Ｌ男）が担任とダンゴ虫探しをしながら山の端に登ってきて木の幹や根元を調べ始める。５歳児のＨ太･Ｉ太は，Ｊ男・Ｋ男・Ｌ男と担任が虫取りをしている木に近づき，そのそばにあるターザンロープにぶらさがって交互に遊びはじめる。

その後，別の４歳児２人（Ｍ男･Ｎ男）も登ってくる。Ｍ男は５歳児（Ｈ太・Ｉ太）のターザンロープ遊びに興味を示し，じっと様子を見ている。しばらくして，「かーわって」と言うが，Ｈ太とＩ太はそのまま遊び続ける。Ｍ男・Ｎ男は待っている間，飽きた素振りを見せるものの，その都度，Ｊ男・Ｋ男・Ｌ男たちと一緒に虫探しをしつつ待ち，その場所からは立ち去らない。

しばらくして，５歳児がターザンロープを終えると，Ｍ男は「もうやめるん？」と聞き，ロープを５歳児から受け取りターザンロープで遊ぼうとし始める。しかし，Ｍ男はロープを受け取ったものの１人ではうまく遊べない。Ｈ太はこのようなＭ男の様子をしばらく見つめ，その後「押してあげようか」と言ってＭ男の遊びを助ける。

エピソード2-1は，５歳児と４歳児がターザンロープを介して行ったやりとりを記述したものである。本エピソードにおいて，５歳児は自分で遊びを見つけている一方で，４歳児は担任保育者のリードや５歳児の遊びに触発されて遊びを見つけている。４歳児はあまりターザンロープで遊んだ経験がなかったため，５歳児がターザンロープで遊んでいる様子に刺激を受け，５歳児の遊ぶ姿をモデルとして，遊びのイメージを持ち，興味を示していることが見て取れる。つまり，４歳児にとって，５歳児の遊ぶ姿は遊びを見つけるきっかけであり，身体の使い方などの遊び方を学ぶ対象でもあった。そのため，森に慣れた年上の幼児から学ぶ環境として森は適する場であるといえる。

その後，Ｍ男は５歳男児が遊んでいたターザンロープに挑戦するものの上手く遊べなかった。Ｈ太は，Ｍ男が上手く遊べない様子をしばらく見ていたが，年長者として，また，森での遊びに慣れた者としてＭ男の遊びを援助している。先行研究において，保育者が年上の幼児と年下の幼児の間の「お世話するーお世話される」という固定的な役割関係を期待しすぎることが年上の子どもへの負担となっていると指摘されている（管田，2008；坪井・山口，2005）。一方で，本エピソードでは，保育者を介さず，子ども自身が異年齢児との関わりの中で自身の立場を相対化し，行動を変容させている。年下の幼児は年上の幼児に対してあこがれや目標を持ちやすい一方で，年上の幼児は年下の幼児に対して教えたりいたわったりする中で自信をつけていくことが指摘されている（管田，2008；入江・内藤・太田・井上・杉崎・黒川・上田・塩原，2003）。森での遊びは身体運用による「できる／できない」を顕在化させやすいと考えられることから，特に異年齢児間のあこがれやいたわりが生じやすく，行動を変化させやすいの

ではないかと考えられる。

また，本エピソードにおいて，虫遊びがその場での幼児の共通の遊びとして機能していたため，M男やN男は待っている間，他の友達と遊びを共有できていないという感情を抱くことがなく，ターザンロープへの興味や関心を持続させることができたのではないかと考えられる。つまり，虫などの生き物の存在が，幼児の遊びに対する興味や関心を維持させていたと考えられる。

エピソード2-2 「ロープ渡り」
６月10日　５歳男児２名，４歳男児数名

５歳男児の２人がロープ渡りに挑戦している。
ちょうどその場所を通った４歳男児数名が，立ち止まり，上を見上げ，ロープ渡りの様子を熱心に見ている。４歳児の１人が，そばで虫探しをしていた保育者に「あれって難しいの？」と聞く。すると，保育者は一緒に上を見上げながら「難しいけど…挑戦してみる？」と答える。
保育者の質問に対し，４歳児たちは５歳児のロープ渡りをしている様子をしばらく見つめるものの返答せず，その後も挑戦しようとはしなかった。

エピソード2-2は，４歳男児が５歳男児のロープ渡りをしている様子を見ている場面である。ロープ渡りとは，約10m離れた木の間に掛けた２本のロープを幼児が渡るもので，幼児はロープの１本を足場に，もう１本を手すりにする。途中，地面からの高さが４～５メートルになる箇所もある。

本エピソードにおいて，４歳男児は５歳男児がロープ渡りをしている様子をじっと見たり，近くにいる保育者にロープ渡りの難易度を質問していることから，自分もロープ渡りをしたいという思いを強く持っているのではないかと推察できる。高度なバランス感覚が必要とされると伴に，高さからくる怖さも存在するため，ロープ渡りは主に５歳児が行うことが多い。本エピソードの４歳児も，ロープ渡りをしたい気持ちはあるものの，怖さや不安の方が勝り，行動には移せなかったのではないかと推察される。

加えて，観察対象園の保育者は，森での遊びにおいて幼児の自主性や自発性を重視することが多く，手出しをしたり正解を教えたりすることを極力避ける傾向がある。そのため，幼児はその遊びに対する「できる／できない」を自分自身で判断する必要がある。自分よりも年上の幼児の姿から刺激を受け，あこがれや自分もやってみたいという願望を抱くものの，他者と自分の身体運用の「できる／できない」を相対化した上で，実際の行動に移すか否かを考えているといえるだろう。

まとめ

幼児の森での遊びの中から，身体運用の「できる／できない」が顕在化した場面を抽出し，検討した。

これを異年齢児の関わりという観点からみると，森での遊びが「できる／できない」を顕在化させることで，森への「慣れ」がある５歳児とそうでない４歳児の間で，身体運用の差となって現れる場合が多かった。そして，「できる／できない」ことに加えて，年齢差のある関係であることが，幼児の遊びへのあこがれや取りくむ意欲，あるいは手伝ってあげようという気持を涵養することにつながっていると指摘できる。また，「できる／できない」が顕在化することによって，幼児は自分の今の立場や状況を相対化し，自分の行動を決定する様子もみられた。一方，同年齢児の関わりの場合は，異年齢児に対する行動の取り方と比べ，友達の「できる」姿は「できない」幼児にとっての嫉妬や焦りの対象となりやすかった。

森の急な斜面や険しい道は，通るだけでも身体運用による「できる／できない」を顕在化させる。樹木などの自然物をそのまま利用した遊びや，人工物ではあるが地形や樹木の高低差を利用して設置された遊具での遊びも，同様に「できる／できない」の差を顕在化させると考えられる。たしかに，身体運用の「できる／できない」が顕在化する場面は森での遊びのみに見られるわけではない。園内にある遊具によっても幼児の「できる／できない」が顕在化され，幼児間での差異化をもたらす遊びは存在する。しかし，森の特性があることによって，たとえ「できない」遊びがあっても，それに固執することなく，他に夢中になれる様々な森での遊びをみつけることができる。つまり，第１に自分で遊びたい対象物や，自分で自由に決めて遊べる場を森が幼児に提供していると考えられる。第２に，森では，幼児の興味を引きやすい虫や植物が存在することから，固定的な遊び方に終止しない多様性や複雑性を有し，幼児の想像力次第で遊びに広がりをもたらす。そして，このよう

な森での遊びが幼児間の関わりの機会を作ったり，他児を観察し，自身の遊びを発展させる契機となっていると考えられる。

本研究では，年齢差や「できる／できない」の身体運用の差が子どもの行動を決定づけるだけでなく，森という場が子どもの遊びに大きな影響を与える要因となり得ることが示された。つまり，森という場は「できる／できない」の身体運用の差や年齢差の隔たりを顕在化させると同時に，それらを超えて，遊びとそれに伴う幼児の関わりを発展・促進させる要因となり得ることが指摘できる。

本研究では，森での身体運用の「できる／できない」の差に焦点を当てて検討した。一方で，森での遊びは，子どもが想像力を用いたり，友達と集団で行動する状況を作り出していることが示唆された。今後は，このような身体運用以外の「できる／できない」に森の特性がどのような影響を与えているのかも含め検討していきたい。

引用文献

遠藤晶・松山由美子・内藤真希（2010）「幼児の異年齢集団によるふれあい遊びにおける相互行為の検討」『武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編』**58**，23-31

入江礼子・内藤知美・太田佐恵子・井上紀子・杉崎友紀・黒川愛・上田陽子・塩原紀子（2003）「異年齢交流を支えるティーム保育の検討－指導計画の変容を手がかりとして－」『鎌倉女子大学紀要』**10**，1-9

管田貴子（2008）「異年齢保育の教育的意義と保育者の援助に関する研究」『弘前大学教育学部紀要』**100**，69-73

国立教育政策研究所教育課程研究センター（2005）『幼児期から児童期への教育』ひかりのくに，2-3

牧亮太・湯澤正通（2011）「幼児の遊びにおけるからかいの機能」『保育学研究』**49**(2)，146-156

松永恵美・郷式徹（2008）「幼児の「心の理論」の発達に対するきょうだいおよび異年齢保育の影響」『発達心理学研究』**19**(3)，316-327

落合さゆり・関口道彦・杉村伸一郎・上田毅・松尾千秋・久原有貴・日切慶子・藤橋智子（2011）「森の保育環境と幼児の身のこなしとの関連」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』**40**，141-146

柴山真琴（2006）『子どもエスノグラフィー入門－技法の基礎から活用まで－』新曜社，47-48

坪井敏純・山口郁（2005）「異年齢保育の中の子どもたち」『南九州地域科学研究所所報』**21**，1-10

都築郁子・上田淑子（2009）「子ども同士のトラブルに対する３歳児のかかわり方の発達的変化－１年間の保育記録とビデオ記録にもとづく実践的事例研究－」『保育学研究』**47**(1)，22-30

付　記

本研究の一部は，日本乳幼児教育学会第22回大会において発表した。

謝　辞

観察にご協力いただいた幼稚園の先生方と園児の皆様に心よりお礼申し上げます。